

マレーシア語話者に対する日本語作文の一指導法

佐藤 佳世

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Program for Teaching Malay Speakers to Write Japanese Composition

SATO Kayo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper is to propose a program of teaching Malay speakers how to write an elementary level Japanese essay. Some Japanese and Malay essays of personal opinion were analyzed focusing on their composition structures. The teaching program suggested in this article is based on the similarities and differences between Japanese composition features and those of Malay.

はじめに

本論文において提案する指導法は文章構成に焦点を当てた日本語作文の指導法である。取り上げる文章の種類はスピーチコンテスト用の原稿作成等で学習者が書くことの多い意見文である。意見文とは「ある事柄や問題について自分の意見を述べ、読み手を理解させ納得させることを目的とした文章」¹、意見とは「何かの事物や出来事や思想などについて自分が考えぬいた結果を述べるもので、結論・立場の主張・提案・解決策・反対論などの形となって表明され」²るもののことである。作文の指導対象は、筆者が経験を有するマレーシアの高等教育機関で初級の日本語を学ぶ者とする。日本語のレベルにおいて初級とは学習時間の総計が 300 時間以内のレベルを指す。高等教育機関の学習者は全員マレーシアの国語であるマレーシア語を理解するので、指導法は日本語とマレーシア語の意見文の構成の異同に基づき作成した。本指導法によって、学習者の書く作文の意味が分かりにくい原因の 1 つである、文章の展開が良くないという問題の改善を目指す。

1. 日本語の意見文の構成

筆者はまず学習者に指導する日本語の意見文の構成を検討するため、先行研究において日本語の意見文はどのような構成で書くとされているのかを調べた。研究により提示されている文章構成と構成を表す言葉が異なり、一般的な見解の把握が困難なので、日本語学習者用の教材から意見文の文章例を抽出し、その構成を分析し、一般的な構成を調べることにした。日本語学習者用の教科書や作文教材、計 43 冊に目を通し、そのうちの 27 教材から約 400 の意見文の文章例を収集した。そしてそれらを字数、文体、論理展開の矛盾の有無等 7 つの基準で 10 教材³中の 50 例に絞り込み、分析対象にした。50 の文章例は、①ある意見・提案に賛成または反対する意見文、②複数の意見のうちの 1 つに賛成する意見文、③ある問題に対して考えを述べる意見文、④複数の選択肢のうちの 1 つを選ぶ意見文の、前記 4 種のいずれかであった。

続いて各文章例がどのような意味の文段により成り立っているかを調べた。文段とは「形式上の改

行一字下げの有無にかかわらず、内容上一つの話題のまとまりを表し、他と相対的に区分される意味のつながりとまとまりのある複数の文の集合統一⁴のことである。文段の分類はEJU日本語研究会の『アカデミック・ジャパニーズ重点攻略 日本留学試験実戦問題集』等を参考に以下の9つに設定した。

- ＜意見表明＞ 既存の意見・提案、現状に対して賛成または反対する
設問に対して考えを述べる
- ＜理由＞ これから理由を述べることを示す
なぜ＜意見表明＞で示した考えを持ったかを述べる
理由に関して考えを述べたり、具体例を挙げたりする
- ＜具体例＞ ＜問題提起＞につながる経験、現状を述べる
次に述べることの導入として現状を述べる
- ＜問題提起＞ ＜具体例＞を基に話題にしたいことを示す
- ＜解答＞ ＜問題提起＞の答えとして、理由、方法、問題点を挙げる
理由や問題点に関して考えや感想を述べたり、具体例を挙げたりする
- ＜譲歩＞ ＜意見表明＞で示した考えに合わない事実、合わないながらも認められる部分、現状のうち良いと認められる部分を示す
- ＜反論＞ ＜譲歩＞で述べたことを覆す具体例や考えを示す
- ＜結論＞ 先述のことから引き出せる決定的な考えを示す
先述の内容をまとめる
- ＜補足＞ ＜意見表明＞で示した考えに関して、誤解を招く恐れのある部分について説明する

これらの名称により 50 の文章例の文段構成を示した結果、20 例にパターン1：＜意見表明＞→＜理由

＞→＜結論＞という展開が、21 例にパターン2：＜意見表明＞→＜譲歩＞→＜反論＞→＜結論＞という展開が、9 例にパターン3：＜具体例＞→＜問題提起＞→＜解答＞→＜結論＞という展開が見られた。なおパターン1と2両方を使用している文章例はパターン2に、2と3両方を使用している文章例はパターン3に含めた。

文段構成の分析結果の詳細は以下のとおりである。パターン1に分類した20例は出典が5教材で、ある意見・提案に賛成または反対する意見文、複数の意見のうちの1つに賛成する意見文、複数の選択肢のうちの1つを選ぶ意見文のいずれかであった。＜補足＞の文段が加えられている1例以外は、＜意見表明＞、＜理由＞、＜結論＞の3文段で構成されていた。パターン2の21例は出典が3教材で、ある意見・提案に賛成または反対する意見文、複数の意見のうちの1つに賛成する意見文のいずれかであった。＜意見表明＞、＜譲歩＞、＜反論＞、＜結論＞というパターン2の構成文段だけで書かれている文章例は1例のみで、19例の＜意見表明＞の文段の後にパターン1の1文段である＜理由＞が加えられていた。＜具体例＞または＜補足＞の文段が加えられている文章例も4例ほどあった。パターン3の9例は出典が6教材で、全文章例がある問題に対して考えを述べる意見文であった。9例中6例が＜具体例＞、＜問題提起＞、＜解答＞、＜結論＞の4文段で構成されていた。＜譲歩＞と＜反論＞の文段が加えられている文章例も3例見られ、それらは＜具体例＞→＜問題提起＞→＜解答＞→＜譲歩＞→＜反論・結論＞または＜具体例＞→＜問題提起＞→＜譲歩＞→＜反論＞→＜解答・結論＞という展開になっていた。

次に筆者は文段構成を分析した結果浮かび上がったパターン1、2、3という展開法が一般的なものかどうかを検討した。先行研究によると段数の観点では、日本語の文章は一般に3段または4段構成で書かれるという。山口佳紀編『講座日本語と日本語教育5 日本語の文法・文体(下)』の「文章の構成」において、鈴木英夫は3段構成を⁵、中村明は『悪文—裏返し文章読本』の中で「起承転結」の4段構成を文章構成の基本に挙げている⁶。また佐久間ま

ゆみは「現代日本語の文章構造類型」の中で、主題が述べられ、意味の上で文章全体を締めくくる機能の位置に関して、文章の最後（尾括型）または最初と最後（両括型）に統括機能がある文章が多いと述べている⁷。筆者が使用した9つの文段では＜意見表明＞と＜結論＞の文段に統括機能があると考えられるので、パターン1は3段両括型、パターン2は4段両括型、パターン3は4段尾括型となる。段数と統括部分の観点においては3パターンいずれもが一般的な日本語の文章構成であると言える。加えてすべてのパターンが著者の異なる3つ以上の教材の文章例に見られた展開法であり、かつ出典教材以外にも同様の構成を示している先行研究があることから3パターンの一般性が示唆できる。例えば「（話題提示）→立場の表明→理由の説明→結論」⁸というパターン1と同じ展開が「課題に基づく意見の述べ方ー日本人大学生の場合・日本語学習者の場合ー」に、「テーマの紹介→自分の意見と反対意見の紹介→意見の提示、反対意見の論破→自分の意見の弱点の補足」⁹というパターン2に類似した展開が『たのしい日本語作文教室Ⅱ 文法総まとめ』に、「具体事例→問題点指摘→資料補足→結論」¹⁰というパターン3と同様の展開が「文章と段落」に提示されている。以上のことから、パターン1、2、3という展開法は日本語の意見文に一般的に用いられるものと考えられるので、学習者に指導する意見文として採用するのに十分な根拠があると言える。

さらに筆者は文章例を細かく分析し、各パターンの意見文の文の配列と表現の特徴を調べた。パターン1の意見文に見られた特徴をまとめると、以下のようになる。まず「～が～ている」等の表現で現状、または「～と言う人がいるが、～」という表現で既存の意見を示し、話題を提起する。続いて話題に対する執筆者の意見を「～に賛成／反対である」、「～と思う」等の表現で述べる。段落を改め、意見の根拠を「なぜなら～からだ」等の表現で示し、理由の説明や関連する例を加える。または意見の文と同じ段落に「～からである」等の表現で理由を示し、新しい段落でそれを説明する。もしくは意見の文の後に「～理由は～つある」、「これからなぜ～と思うかを述べる」等理由を述べることを予告する文を置き、

理由の内容ごとに段落を改めながら、「第一／第二～は～である」等の表現を用いて理由を挙げる。そして新しい段落で「だから～と思う」等の表現を用いて結論を述べるというのがパターン1の意見文の文の配列と表現であった。パターン2はまず「～が～ている」等の表現で現状、または「～と言う人もいれば～と言う人もいる」等の表現で既存の意見を示し、話題を提起する。続いて話題に対する執筆者の意見を「～に賛成／反対である」、「～と思う」等の表現で述べる。段落を改め、「確かに」または「もちろん」という語の後、自身の考えに合わない事実や合わないながらも認められる部分を挙げる。接続詞「しかし」の後、先述の内容を覆すような例や考えを示す。最後に新しい段落で「従って～と思う」等の表現により結論を述べるというのがパターン2の意見文に特徴的な文の配列と表現であった。パターン3はまず現状または経験を示し、問題提起の前置きをする。現状指摘には「～ている」等の表現を用いる。経験を述べる場合はまず「～ていた」という表現である経験をするまで執筆者自身がどうだったかを示し、次に「ところが～てしまった」等の表現で予想や期待に反した経験を述べる。または執筆者が行ったことを示した後、「～と思った」等の表現でその経験に対する感想を述べる。現状や経験の中で問題と思われる点を「（疑問詞）～のだろうか」、「～のだろうか」という疑問文、もしくは「～について考えてみたいと思う」という平叙文で示す。段落を改め、「その理由はまず／もう1つの理由は～からである」、「まず／次に／最後に～ことである」等の表現を用いて、提起された問題の答えとなる理由や方法、問題点を挙げる。答えごとに段落を改め、それぞれに説明や例を加える。最後に再び段落を改め、「～と思う」、「～だろうか」等の表現で結論を述べるというのがパターン3の意見文の特徴であった。

最後に筆者は上記のような展開の意見文が初級の学習者に指導可能かどうかを表現のレベルの観点から検討した。初級というレベルは日本語能力試験の3級と4級に当たるので、国際交流基金編著『日本語能力試験出題基準〔改訂版〕』の3、4級の文字・語彙と文法のリストを用いて、各パターンの意見文の主な表現が初級で学習するものであるかどうかを

調べた。パターン1には話題提起に用いる「～ている」、「～がいる」等の表現、意見と結論の文の文末に用いる「～と思う」等の表現、結論の文の文頭に用いる「だから」、理由を述べる表現、理由列挙の表現等が必要であるが、これらはすべて初級で学習する。よってパターン1の意見文は初級の学習者に問題なく指導できると考えられる。パターン2には初級では学習しない、譲歩の文の文頭に用いる「確かに」と結論の文の文頭に用いる「従って」が必要である。しかしこれらは初級で学習する「もちろん」や「だから」で代用でき、かつ話題提起に用いる表現、意見と結論の文の文末表現、反論の文に用いる「しかし」や「～が、～」は初級で学習するので、パターン2の意見文も初級の学習者に指導可能と考えられる。パターン3には＜具体例＞の文段に用いる、現状を示す「～ている」、経験を書く際に用いる過去形の文と「～てしまう」等の表現、問題提起文に用いる疑問詞や「～ついて～」等の表現、＜解答＞の文段に用いる内容列挙の表現と「～こと」という名詞化の表現、結論の文の文末表現が必要であるが、これらは初級で学習する。しかし＜具体例＞の文段に用いる、ある経験をする前どうだったかを表す「～ていた」と予想に反する展開を表す接続詞「ところが」、「～のだろうか」という問題提起文の文末表現は初級以上で学習する表現である。しかしこれらの表現は、例えば過去の状態を表す「～ていた」は初級で学習する、現在の状態を表す「～ている」から導入するなど、初級の学習表現と関連付けて説明すれば理解を促せる範囲のものと考えられるので、パターン3の意見文も初級の学習者に指導可能と思われる。3つのパターンの意見文の指導順は、表現の難易度から判断して、パターン1、2、3の順が良いと考える。

2. マレーシア語の意見文の構成

日本語の意見文の構成に続き、筆者は学習者の共通言語であるマレーシア語の意見文の構成を調べた。日本語同様文章例を分析する方法を取り、マレーシアで毎年行われる全国統一試験のマレーシア語作文

の対策集に掲載されている文章例を分析対象にした。全国統一試験対策集の文章例を選んだのは、この試験は学校教育の到達試験なので標準的な文章を扱っていると考えられる上、高等教育機関の学習者は初等、中等教育時に少なくとも3回全国統一試験を受験しているため、全員が対策集にあるような作文を書いていると思われるからである。筆者は市販されている対策集の中から著者の異なる対策集を10冊¹¹、初等教育6年次に受けるUjian Penilaian Sekolah Rendah用の対策集を3冊、中等教育3年次に受けるPenilaian Menengah Rendah用の対策集を4冊、5年次に受けるSijil Pelajaran Malaysia用の対策集を3冊無作為に選んだ。そしてそこに掲載されている文章例から論理展開に問題のない意見文を抽出し、さらにその中からある意見・提案に賛成する意見文、ある意見・提案に反対する意見文、ある問題に対して考えを述べる意見文のうち解決策を話題にしているもの、ある物事の利点と欠点を述べる意見文をそれぞれ5例ずつ、ある問題に対して考えを述べる意見文のうち原因を話題にしているもの、ある物事に利点があることを述べる意見文、あることを実現するための方法を述べる意見文をそれぞれ3例ずつ選んだ。同種の意見文はすべて異なる対策集から選んだ。そしてそれらをマレーシア語から日本語に翻訳し、訳文を日本語の意見文と同じ方法で分析した。以下に文段構成の分析結果を示す。

ある意見・提案に賛成する意見文は全例が＜意見表明＞→＜理由＞→＜結論＞という展開で書かれていた。ある意見・提案に反対する意見文は3例が＜意見表明＞→＜理由＞→＜結論＞、1例が＜理由＞→＜結論＞、1例が＜譲歩＞→＜反論＞→＜結論＞という展開になっていた。ある問題に対して考えを述べる意見文は4例が＜具体例＞→＜問題提起＞→＜解答＞→＜結論＞、3例が＜具体例＞→＜解答＞→＜結論＞、1例が＜解答＞→＜結論＞という展開であった。ある物事の利点と欠点を述べる意見文は2例が＜具体例＞→＜問題提起＞→＜解答＞→＜結論＞、同じく2例が＜具体例＞→＜解答＞→＜結論＞、1例が＜解答＞→＜結論＞という展開で書かれていた。ある物事に利点があることを述べる意見文はすべて＜意見表明＞→＜理由＞→＜結論＞という

展開になっていた。あることを実現するための方法を述べる意見文3例はそれぞれ<具体例>→<問題提起>→<解答>→<結論>、<問題提起>→<解答>→<結論>、<解答>→<結論>という展開であった。12の文章例にパターン1、1例にパターン2、16例にパターン3の展開のすべてまたはその一部が見られたことから、パターン1と3は日本語、マレーシア語、両言語の意見文において使用される展開法であるのに対し、パターン2は日本語の意見文では一般的に使用されるが、マレーシア語の意見文ではあまり使用されない展開法であることが予測できる。

次に筆者はパターンごとに意見文の文の配列傾向を調べた。各パターンの傾向は以下のとおりであった。パターン1はまず現状等の指摘で話題を提起し、それに対する執筆者の意見を示す。段落を改め、意見の根拠を3つ以上挙げる。理由ごとに段落を変え、各段落の最初に「第一／第二」、「また」等の表現を用いて理由を示し、説明や例を加える。最後に再び段落を改め、「以上のことから」等の表現を文頭に結論を述べるという展開であった。1文章例にしか見られなかったパターン2はまず譲歩した内容を示し、その詳細を複数の段落で説明する。その量は文章全体の半分以上に当たる。段落を改め、「しかし」という接続詞の後反論し、それに関連した事実を挙げる。最後に新しい段落で結論を述べるという展開になっていた。パターン3には以下の2つの展開が多く見られた。ある問題の解決策や原因、あることを実現するための方法について述べる意見文はまず現状を示し、それを説明する。段落を改め、「～なければならない」、「～必要がある」等の表現で問題を提起し、方法または原因を内容ごとに段落を変えながら3つ以上列挙する。「も」、「また」等の語を用いて、各段落の最初に方法または原因を示し、説明を加える。最後に再び段落を改め、「以上のことから」、「よって」等の表現の後結論を述べるという展開であった。ある物事に利点と欠点両方があることを述べる意見文は現状指摘に続き、利点と欠点両方があることを示す。段落を改め、利点を列挙し、「しかし」、「一方」という接続詞の後欠点の存在を指摘し、具体的な欠点を挙げる。最後に新しい段落で結論を述

べるという展開であった。なお利点と欠点の列挙法はある問題の解決策や原因、あることを実現するための方法について述べる意見文と同じであった。

3. 日本語とマレーシア語の意見文の構成上の異同

50の日本語の意見文と29のマレーシア語の意見文における典型的な構成を1と2にまとめた。これらの構成を対照し、筆者が分析した範囲内の日本語とマレーシア語の意見文の構成の異同を以下に示す。文段レベルの相違点は次のA、類似点はBである。

A. パターン2の使用度

日本語の意見文において一般的な展開法と考えられるパターン2はマレーシア語の意見文にはあまり見られない。

B. パターン1と3の使用

パターン1と3は日本語、マレーシア語どちらの意見文にも使用される展開法である。

次に文レベルの相違点と類似点を示す。パターン1の意見文に見られた相違点はCとD、類似点はEとFである。

C. 理由の列挙数

日本語の意見文では1つの文章に理由が1つか2つ挙げられるのに対し、マレーシア語の意見文では3つから6つ列挙される。分析したマレーシア語の文章例の大半は180語以内で書かれ、その日本語訳は400字から800字程度となり、選んだ日本語の文章例の字数と同じであることから、マレーシア語の意見文は日本語の意見文より理由の提示数が多いと言える。また日本語の意見文では理由の多くにそれに関する例が付されるのに対し、マレーシア語の意見文にはそれがあまり見られない。マレーシア語の意見文は日本語の意見文に比べ、理由を説明する量が少ないと考えられる。

D. 理由予告文の有無

理由を列挙する場合、日本語の意見文では＜意見表明＞の文段の後に理由を述べることを予告する文や理由の数を示す文を置くことが多いのに対し、マレーシア語の意見文にはそのような文がほとんど見られない。

E. ＜理由＞の文段における理由を示す文の位置

理由の内容が変わるごとに段落を改め、段落の最初に理由を示し、その説明を後続させる傾向が日本語、マレーシア語、両言語の意見文に見られる。

F. 理由と結論の文の表現

日本語、マレーシア語いずれの意見文においても理由の列挙には「第一／第二」、「また」等の表現が、結論の文の文頭には「以上のことから」等の表現が用いられる。

パターン2の意見文に見られた相違点は次のGである。

G. ＜譲歩＞の文段の量と内容

日本語の意見文の＜譲歩＞の文段には執筆者自身の考えに合わない事実、合わないながらも認められる部分等が1文程度で示され、その量は＜反論＞の文段と同程度、または＜反論＞の文段より少ない。一方のマレーシア語の意見文の＜譲歩＞の文段には話題の物事の欠点が列挙され、話題の物事の利点を示した＜反論＞の文段よりも量的に多い。

パターン3の意見文に見られた相違点は以下のH、I、J、類似点は以下のKとLである。

H. ＜具体例＞の文段の内容

日本語の意見文の＜具体例＞の文段には執筆者自身の経験が多く書かれるのに対し、マレーシア語の意見文にはそれが見られない。筆者が日本語の文章例の選択基準に執筆者独自の内容があることを含めたことも関係していると思われる。

I. 問題提起文の使用度、位置、表現

日本語の意見文には執筆者が問題に感じ、これ

から話題にしたいことを示す文が置かれることが多いのに対し、マレーシア語の意見文にはそのような文が置かれているものと置かれていないものがある。また日本語の問題提起文は「～のだろうか」という疑問文の形を取り、＜具体例＞の文段と同じ段落に置かれることが多いが、マレーシア語の問題提起文は「～なければならない」、「～必要がある」という平叙文の形を取り、＜具体例＞の文段とは異なる段落に置かれることが多い。

J. ＜解答＞の文段における答えの列挙数

日本語の意見文の＜解答＞の文段には提起された問題に対する答えとして理由、方法、問題点が、マレーシア語の意見文の＜解答＞の文段には方法、原因、利点、欠点が書かれる。その列挙数は日本語の意見文は3点以内、マレーシア語の意見文は3点以上で、マレーシア語の意見文の方が概して多い。

K. ＜解答＞の文段における答えの文の位置

日本語、マレーシア語、両言語の意見文において、提起された問題に対する答えは＜解答＞の文段を形成する各段落の最初に示されることが多い。

L. 解答と結論の文の表現

日本語、マレーシア語いずれの意見文においても、＜解答＞の文段中の答えの列挙には「もう1つ」等の表現、結論の文の文頭には「以上」等の表現が用いられる。

以上の12点が分析した日本語とマレーシア語の意見文の構成の相違点と類似点である。筆者はさらにこれらの異同がより確かなものであるように、マレーシア語文章例の出典となった10冊の全国統一試験対策集に掲載されている意見文で、分析対象としなかった約300の文章例に目を通し、上記の異同の正否を確認してみた。その結果、Iに挙げた問題提起文の位置以外は概ね全般的な傾向であることが分かった。Iでは日本語の問題提起文は＜具体例＞の文段と同じ段落に、マレーシア語の問題提起文は＜具体例＞の文段とは異なる段落に置かれることが多いとしたが、マレーシア語の意見文の問題提起文

は<具体例>の文段と同じ段落にあることも異なる段落にあることもあり、問題提起文の位置は両言語の意見文の相違点とはみなせなかった。

4. パターン1、2、3の意見文の指導法

3で指摘した日本語の意見文とマレーシア語の意見文の構成上の異同を基礎材料に、筆者は初級の学習者にパターン1、2、3の意見文をどのように教えるべきかを考察した。類似点に関してはマレーシア語の文章構成の知識が日本語作文にも使えることを学習者に意識させるように、相違点に関しては予想される誤用が起きないように注意し、指導法を作成した。以下に各パターンの意見文の指導手順を示すが、各段階の練習例については筆者の修士論文¹²を参照していただきたい。

(1) パターン1の意見文の指導手順

- ① 問答法により意見表明文と理由提示文を練習させる。
- ② ①で口頭練習した文を作文に書く形に変えて書かせる。
- ③ マレーシア語の意見文は一般にどのような構成で書くか思い起こさせる。3のBにあるように、パターン1と3の展開法は日本語とマレーシア語の意見文どちらにも使用されるので、想起によりマレーシア語の意見文の構成が日本語の意見文にも使えることに気付かせる。次にマレーシア語の意見文に用いる主な表現を挙げさせ、それに相当する日本語の表現を考えさせる。そしてFとLに示したような段落間の接続表現が両言語の意見文に共通していることを意識させる。山下みゆきも「日本語学習者の前置き表現の使用の実際～課題に基づく意見文より～」の中でこの方法を提案している¹³。
- ④ 話題提起文、意見表明文、理由提示文、結論文を順不同に提示し、並べ替えさせる。1つの文章に挙げる理由の数は1つまたは2つとする。Dで述べたように、日本語の意見文には理由予告文が置かれることが多いのに対し、マレーシア語の意

見文にはそのような文があまり置かれられないので、理由が2つある意見文の練習の選択肢には理由予告文を含め、その存在を意識させる。

- ⑤ 話題提起文、意見表明文、理由予告文、理由提示文、結論文のうちの数文が空欄の文章を提示し、空所補充をさせる。作文が困難な場合は学習者同士の議論や教師との相談にマレーシア語の使用を認める。池田玲子も「日本語作文におけるピア・レスポンス」の中で、「母語が共通である学生同士の場合、母語使用を認めることによって思考は活発になり、response 内容もより深まることも予想される」¹⁴と述べている。マレーシア語は学習者の母語ではない場合もあるが共通語なので、その利用は効果的と考えられる。
- ⑥ 第1段落に話題と意見と理由1つを示し、第2段落で理由を説明し、第3段落で結論を述べるという3段構成の文章を提示し、話題提起文、意見表明文、理由提示文、結論文がどの段落のどの部分にあるかを確認させる。第2段落には話題提起文に示した既存の意見2つのうち執筆者が反対する意見の欠点と賛成する意見の長所を並べ、賛成意見の長所を強調する形を取る。最後に提示した文章中の文を順不同にしたものを見せ、それらを正しい順番、段落分けにして書く練習をさせる。
- ⑦ 第1段落に話題と意見と理由数を示し、第2、第3段落に理由を1つずつ挙げ説明し、第4段落で結論を述べるという4段構成の文章を提示し、話題提起文、意見表明文、理由予告文、理由提示文、結論文がどの段落のどの部分にあるかを確認させる。理由が各段落の最初に示されるという、Eに挙げた日本語とマレーシア語の意見文の類似点に気付かせる。第2、第3段落の理由の説明部分の内容は執筆者自身の経験とする。第2段落は「～たことがある」という表現で過去の経験を挙げ、それを説明し、感想を述べるという文章にする。第3段落は「～ていた」という表現で過去の状態を示し、「しかし」という接続詞の後予想に反した経験を述べるという文章にする。これらは分析したパターン1の意見文数例の<理由>の文段に見られ、かつパターン3の<具体例>の文段における執筆者の経験の記述にも通じる文章

展開である。なお「～ていた」という表現は初級以上で学習するものなので、初級で学習する「～ている」と関連させて説明する必要がある。最後に提示した文章中の文を順不同にしたものを見せ、それらを正しい順番、段落分けにして書く練習をさせる。

- ⑧ 用意された質問に答えていくと自然に文章が書ける誘導作文という方法により、⑥と⑦で導入した展開の意見文を書かせる。小宮千鶴子も「文章構成法による作文指導の試みー初級後半における内容作り・構成を中心としてー」の中で、作文学習初期にはアウトラインと文章の構成要素である段落との対応関係を理解させることが必要であると述べ、誘導作文の指導例を紹介している¹⁵。またCに示したように、マレーシア語の意見文の方が日本語の意見文より理由の列举数が多いので、意見の根拠を問う質問に対して学習者が理由を多数挙げた場合は主なものを選んで書くように指導する。

- ⑨ ⑧の作文を提出前に学習者に自己訂正させる。石橋玲子は『第2言語習得における第1言語の関与ー日本語学習者の作文産出からー』において「学習者のセルフモニタリングによる自己訂正が、教師のフィードバックの前に行われれば、教師の情報に対する注意がより喚起され、学習に結びつくことが期待される」¹⁶と述べている。提出された作文は誤用の種類を表記、語彙、文法、構成等に分類し、それを符号で表して返却する。間違いを自己訂正させ、再提出させる。

- ⑩ 再提出された作文を添削し、学習者に返却する。

(2) パターン2の意見文の指導手順

- ① Aで述べたように、パターン2はマレーシア語の意見文にはあまり使用されない展開法であると考えられるので、学習者が初めて学ぶ展開法として扱い、パターン1と2の意見文の共通部分を利用して導入する。パターン1の指導手順⑥で使った3段構成の文章中の話題提起文と意見表明文を見せ、この2文の後<理由>→<結論>という展開以外にどのような展開があり得るかを考えさせた上で、譲歩、反論、結論に当たる文を

提示する。Keith Johnson, Keith Morrow 編著の『言語教育・応用言語学叢書 コミュニカティブ・アプローチと英語教育』にも文章構成の指導法の1つとして、ある文章を他の構成で書けるかどうか検討するという方法が取り上げられている¹⁷。パターン1の意見文の第2段落には執筆者が支持しない方の意見の欠点と執筆者が賛成する意見の利点がかかれているのに対し、パターン2の意見文は執筆者が支持しない方の意見の利点と執筆者が賛成する意見の利点が挙げられているという相違に注意させる。

- ② 話題提起文、意見表明文、譲歩文、反論文、結論文を順不同に提示し、並べ替えさせる。

- ③ ②の5文で書かれた文章を提示し、空欄に適切な語や文を補充させる。

- ④ 第1段落に話題と意見を示し、第2段落の1文目に執筆者の意見にそぐわない事実、2文目に執筆者の意見を補強する事実、3文目以降に2文目に示した事実の具体例を挙げ、第3段落で結論を述べた3段構成の文章を提示し、②の5文がどの段落のどの部分にあるかを確認させる。最後に提示した文章中の文を順不同にしたものを見せ、それらを正しい順番、段落分けにして書く練習をさせる。

- ⑤ 誘導作文により④で導入した展開の意見文を書かせる。

- ⑥ ⑤の作文を自己訂正させた上で回収し、パターン1の意見文の指導手順⑨と同じ方法で添削する。

- ⑦ 再提出された作文を添削し、学習者に返却する。

- ⑧ 日本コミュニケーション学会 橋本満広、石井敏編『コミュニケーション基本図書第3巻 英語コミュニケーションの理論と実際』の第7章「英語を書くコミュニケーション」に掲載されている英語の論理展開の指導法¹⁸を参考に、Gで指摘した、日本語の意見文とマレーシア語の意見文の<譲歩>の文段の相違から誤用が起こった場合の対処法を加える。学習者の書いた作文の中からマレーシア語の意見文の構成の干渉が見られる文章と日本語の意見文のパターン2の展開を用いてうまく書けている文章を選び、提示し、両作文

の各文が＜意見表明＞と＜結論＞の文段に示されている執筆者の立場を支持する内容か否か、もしくは中立の内容かを確認させる。アルファベット等の符号でそれを視覚化し、執筆者の立場を支持する内容としない内容の比重等について議論する。構成以外の間違いを訂正した作文を各自に返却し、自分の作文の構成を同様の方法で確認させる。パターン2の展開で書けていない場合は再提出させる。

(3) パターン3の意見文の指導手順

- ① パターン1、2の意見文とパターン3の展開の意見文とに共通している話題提起として現状を示す文と結論の文を見せ、パターン1と2以外の両文間の展開を考えさせる。そしてパターン3の展開法がマレーシア語、日本語、両言語の意見文に使用できることを認識させる。
- ② 話題提起文（現状指摘）、問題提起文、解答文、結論文を順不同に提示し、並べ替えさせる。Iで指摘したように、日本語の意見文はマレーシア語の意見文より問題提起文の使用度が高いので、練習の選択肢には必ず問題提起文を含め、その存在を意識させる。またマレーシア語の意見文のものは異なる日本語の問題提起文の表現も並べ替え練習の中で導入する。現状の原因または理由を話題にする「どうして／なぜ～ののだろうか」と「～原因／理由は何なのだろうか」という表現、解決策を話題にする「どうすれば～ののだろうか」という表現、原因、理由、解決策すべてに使用できる「～考えてみたいと思う」という表現を順次提示する。なお初級以上で学習する「～ののだろうか」は初級で学習する「～だろう」と「～のだ」から説明する。
- ③ 話題提起文（現状指摘）、問題提起文、解答文2文、結論文を空欄にした文章を提示し、適当な文を選択補充させ、完成した文章をどのような段落分けにすべきか考えさせる。作業後の文章は第1段落に現状と問題視したこと、解決策を話題にする旨、第2、第3段落に解決策、第4段落に結論を示した4段構成の文章となる。Kに挙げた、日本語の意見文とマレーシア語の意見文の＜解

答＞の文段における類似点、答えの文が段落の最初に置かれる点に気付かせる。

- ④ ＜具体例＞の文段から＜解答＞の文段までの文章を提示し、空欄になっている問題提起文を作成させる。
- ⑤ ＜具体例＞の文段から＜解答＞の文段までの文章を提示し、空欄になっている、提起した問題に対する答えの文を作成させる。
- ⑥ ＜具体例＞の文段に執筆者の経験を書く練習をさせる。Hで述べたように、マレーシア語の意見文の＜具体例＞の文段には執筆者の経験が書かれないので、分析した日本語の意見文にあり、かつ汎用性があると思われる執筆者の経験の書き方を2つ提示する。これらはパターン1の意見文の指導手順⑦で既に提示してある。1つは「～で～という～を読んだ／見た／聞いた」という表現で話題を提起し、その感想を述べ、問題提起につなげるという展開、もう1つは「～時のことだ」という表現である出来事の発生を示し、「～ていた」という表現で出来事が発生するまで執筆者が考えていたこと、「ところが～た」という表現で予想に反して起こったことを述べ、問題提起文につなげるという展開である。「ところが」は初級の学習語彙ではないが、使用した方が出来事の意外性が強調されるので、この練習の中で導入する。2つの文章展開を確認後、各方法で自身の経験が書ける話題を与える。
- ⑦ 学習した表現と展開法を用いて、誘導作文により意見文を書かせる。Jで述べた日本語とマレーシア語の意見文の＜解答＞の文段の相違が原因で、学習者が提起された問題に対して答えを多数挙げるようであれば、主なものを選んで書くよう指導する。
- ⑧ ⑦の作文を自己訂正させた上で回収し、パターン1の意見文の指導手順⑨と同じ方法で添削する。
- ⑨ 再提出された作文を添削し、学習者に返却する。

以上が筆者が提案するパターン1、2、3の意見文の指導法である。各パターン第1回目の指導では全手順を取り、2回目以降は学習者の能力やパタ

ーンの定着度により必要な部分を選び、同じパターンを何度も指導することとする。日本語教育機関により使用教科書や学習時間が異なるので、各段階の練習量と学習者に提示する例文の表現や内容は各機関の事情に合わせて変えることとする。また筆者は文章構成の定着を第一に考え、各文段の表現と展開を限定したので、学習者の習得状況により指導手順にあるもの以外の提示も検討していく必要がある。

おわりに

マレーシアの高等教育機関で初級の日本語を学ぶ者の文章構成力の向上を目標にした日本語作文の指導法を以上に提案した。指導する文章に意見文を選び、日本語の意見文と学習者の共通言語であるマレーシア語の意見文の構成を調べ、マレーシア語作文のどのような知識が日本語作文に活用できるか、反対にどのような知識が悪影響を及ぼすかを予測し、3つの日本語の意見文の展開法の指導手順を4に示した。

筆者は本研究には次の2つの意義があると考えている。1つは日本語の意見文の一般的な構成については統一見解がない中、文章例分析により比較的多用される構成が把握できたことである。もう1つは提案した指導法はマレーシアの日本語学習者の中で最も多い初級者を対象にしたものなので、マレーシアの多くの日本語教育機関で利用可能なことである。またマレーシアの国語であり、マレーシアでそれを母語とする人が最も多いマレーシア語と関連した指導法なので、学習者への効果も大きいと予想される。反対に本研究には反省点もあり、日本語とマレーシア語の意見文の対照分析の結果のみを指導手順考案の材料にしたこと、学習者の共通言語であるマレーシア語のみを取り上げ、個々の学習者の母語や作文経験の量に配慮しなかったことなどがそれである。対照分析の結果の正確性を高めるには分析文章例の件数と分析方法の見直しも必要である。そして何よりも本研究は指導法の提案に留まっているので、教材開発、現場での試行、効果の検証へと研究を進めなければならない点は今後の大きな課題である。研究を継続し、マレーシアの日本語学習者により効果

的な日本語作文の指導法をこれからも追究していく所存である。

註

1. 神田靖子、山根智恵編著 『日本語を書く楽しみ』 西日本法規出版 2004年 p.75
2. 平井昌夫 『何でもわかる文章の書き方百科』 三省堂 2003年 p.469
3. 参考文献1、2、4-9；註1、9の文献
4. 佐久間まゆみ 『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』 2000年 pp.1-2
5. 山口佳紀編 『講座日本語と日本語教育5 日本語の文法・文体（下）』 明治書院 1989年 pp.88-90
6. 中村明 『悪文－裏返し文章読本』 ちくま新書 1995年 pp.53-54
7. 佐久間まゆみ 「現代日本語の文章構造類型」 『日本語学論説資料 36』 論説資料保存会 1999年 p.190
8. 佐々木泰子 「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場合－」 『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』 国立国語研究所 2001年 p.225
9. 吉田妙子編著 『たのしい日本語作文教室Ⅱ 文法総まとめ』 大新書局 2003年 p.87
10. 長尾高明 「文章と段落」 『日本語学4月号』 明治書院 1992年 p.30
11. 参考文献10-19
12. 佐藤佳世 『マレーシア語話者に対する初級日本語作文の指導法』 日本大学大学院総合社会情報研究科 2004年 pp.50-62
13. 山下みゆき 「日本語学習者の前置き表現の使用の実際～課題に基づく意見文より～」 『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』 国立国語研究所 2001年 p.217
14. 池田玲子 「日本語作文におけるピア・レスポ

- ンス」 『拓殖大学日本語紀要第8号』
拓殖大学留学生別科 1998年 p.236
15. 小宮千鶴子 「文章構成法による作文指導の試みー初級後半における内容作り・構成を中心としてー」 『日本語学校論集14号』
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校 1987年 pp.74-75
16. 石橋玲子 『第2言語習得における第1言語の関与ー日本語学習者の作文産出からー』
風間書房 2002年 p.128
17. Keith Johnson, Keith Morrow 編著
小笠原八重訳 『言語教育・応用言語学叢書 コミュニカティブ・アプローチと英語教育』
桐原書店 1984年 p.124
18. 日本コミュニケーション学会 橋本満広、石井敏編 『コミュニケーション基本図書第3巻 英語コミュニケーションの理論と実際』
桐原書店 1996年 pp.193-194
- ズ重点攻略 日本留学試験実戦問題集』
The Japan Times 2004年
10. Azizah Saliman “Model Karangan UPSR Dinamik”
Preston Corporation Sdn.Bhd. 2004
11. Hamed Mohd Adnan, Abd. Rahman Nurdin “180 Karangan Contoh SPM” Penerbit Elman Sdn.Bhd. 2001
12. Izarudin, Azmah Nordin “400 Contoh Karangan & Merumuskan/Meringkaskan Karangan”
PNI Neuron (M) Sdn.Bhd. 2004
13. Kamaruddin Saad “105 Karangan Pilihan Bahasa Melayu UPSR” Minerva Publications 2002
14. Mohd Hazlan, C.P.Lai, Sundram “Teknik Berkesan Mengarang Karangan Terbaik Peralihan”
Eastview Publications Sdn. Bhd. 2000
15. Ng Chan Heng, Aminuddin Rosli “Contoh Karangan Bahasa Malaysia PMR”
Penerbitan Pelangi Sdn.Bhd. 2004
16. Nurul Aina Bt. Hisyam “Inti Sari 220 Contoh Karangan PMR” Pan Asia Publications Sdn. Bhd. 2002
17. Rohani Kamsan, Yeo Kee Jiar “Contoh Karangan Bahasa Malaysia SPM” Penerbitan Pelangi Sdn.Bhd. 2000
18. Rozieta Shaari “150 Contoh Karangan Bahasa Malaysia UPSR” Penerbit Fajar Bakti Sdn.Bhd. 2004
19. Ruziatul Adibah Adnan “155 Karangan Contoh & Bimbingan SPM” Penerbit Elman 1999

(Received : September 30, 2005)

(Issued in internet Edition: November 20, 2005)

参考文献

1. 門脇薫、西馬薫 『みんなの日本語初級 やさしい作文』 スリーエーネットワーク 2000年
2. 倉八順子 『日本語の作文技術ー中・上級』
古今書院 2000年
3. 国際交流基金編著 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』 凡人社 2002年
4. 佐藤政光、加納千恵子、田辺和子、西村よしみ 『実践にほんご作文』 凡人社 1987年
5. 清水明美、岩沢正子、加藤清、武田明子、福沢健編 『プラクティカル日本語 文章表現編ー成功する型ー』 おうふう 2003年
6. 文化外国語専門学校日本語課程編著 『文化中級日本語 I』 文化外国語専門学校 1994年
7. 松岡龍美、目黒真実、青山豊 『《日本留学試験対策》記述問題テーマ100』 凡人社 2002年
8. 村澤慶昭 『アカデミック・ジャパニーズ対応 日本留学試験標準問題集 [記述問題]』
ユニコム 2003年
9. EJU 日本語研究会 『アカデミック・ジャパニー